

主体性・多様性・
協働性を育む
高大連携の実現に向けて

高校・大学での教育改革と連動した 大学入試改革のゆくえ

文部科学省中央教育審議会で議論が続けられてきた
高大接続に向けた改革の全体像がいよいよ明らかになってきた。
「生きる力」「確かな学力」を着実に養っていくための
高校教育・大学教育・大学入学者選抜の三位一体の改革は
どのように進められていくのか。その全体像をレポートする。

まとめ / 伊藤敬太郎

これからの時代を担う人材に求められる 「主体性・多様性・協働性」

今、日本の社会は生産年齢人口の急激な現象、グローバル化・多極化の進展の中で大きな変化を求められている。そこで大きな課題となっているのが、この変化する社会で、今までになかったさまざまな問題を解決し、新しいしゅみを生み出していくことができる人材をどう育てていくかということだ。

文部科学省の中央教育審議会は、「これからの新しい時代に自らの人生を切り拓き、他者と助け合いながら、幸せな暮らしを営んでいける力」を育むための教育が必要だとし、その力を「豊かな人間性」「健康・体力」「確かな学力」の3つを総合した「生きる力」としてまとめている。

中でもキーワードとなるのは「確かな学力」だろう。従来型の「学力」は知識・技能の量を問うものだった。しかし、知識があるだけでは現実にある課題を解決できず、人を動かすこともできない。これからの時代には、知識・技能を活用する力、さらには

その力を生かして、自ら行動し、人を巻き込んでいく力が求められる。それこそが「確かな学力」だ。

図1に示したように、「知識・技能」はあくまで土台であり、それを活用するために必要とされるのが「思考力・判断力・表現力」。そして、その上位には「主体性・多様性・協働性」が位置づけられている。この力の意味するところは、「主体性をもって他者を説得し、多様な人々と協働して新しいことをゼロから立ち上げることのできる、社会の現場をリードするイノベーションの力」だ。

スムーズな高大接続のネックになっている 知識偏重型の大学入試をどうするか

では、この「確かな学力」を育むためにはどのような教育が必要なのだろうか。すでにそのための改革は初等中等教育、高等教育のそれぞれの段階で始まっている。

義務教育に関しては、学級やグループで話し合う活動、調べたことや考えたことを発表し合う言語活動、各教科や総合的な学習の時間を活用した探究的な学習など、「学力の三要素」に対応した教育が浸透してきている。PISA、全国学力・学習調査などの結果にもその努力が反映されていると中教審では評価している。

一方、高校でも、次世代リーダーの育成を目的としたスーパーグローバルハイスクール、スーパーサイエンスハイスクールの創設や、総合的な学習の時間を活用した課題探究の鍛錬などはすでに行われている。また、大学においてもアクティブラーニング（能動的学習）の導入など教育改革の動きが活発化してきている。しかし、これらの取り組みはあるものの、義務教育での成果を高等教育へと十分につなげることができているとはいえないのが現状だ。

高校では、大学入試に対応する必要があるため、画一的な

図1 高校・大学で育むべき「確かな学力」

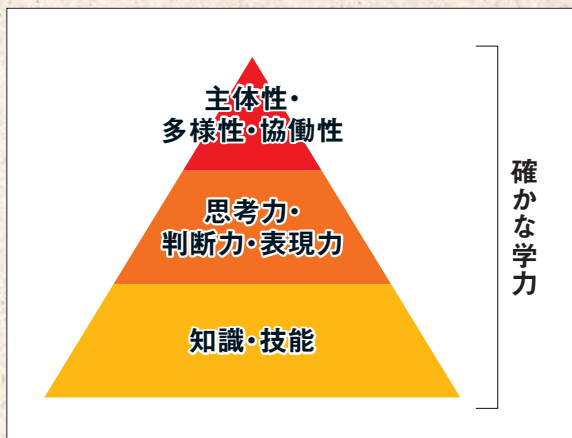
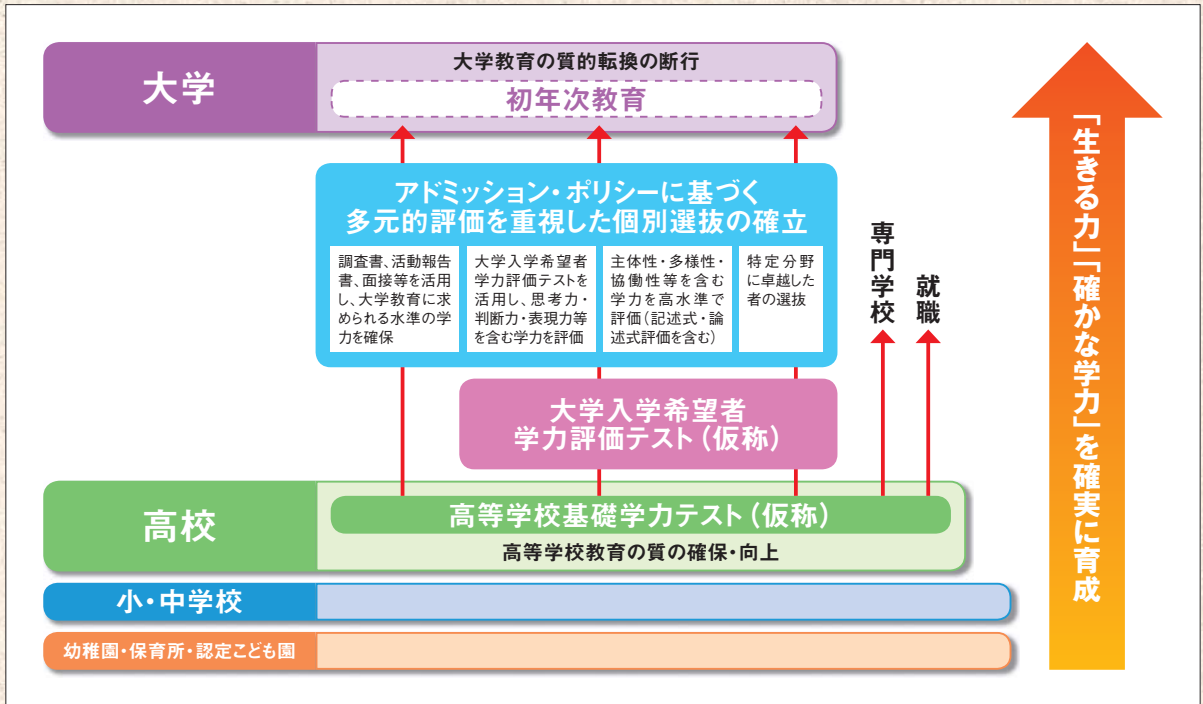


図2 大学入学者選抜改革の全体像イメージ(案)



文部科学省 中央教育審議会 高大接続特別部会 第21回 2014.10.24 資料より作成

詰込み型教育から脱却することは難しいという実情がある。そのため、生徒の多様な個性を伸ばしたり、幅広い視点を磨いたりする教育が十分に行われているとは言い難い。

高校で生徒の主体性や多様性が養われていないうえ、入試では1点刻みで知識を問う画一的な評価によって学生を選抜しているため、大学においても「主体性・多様性・協働性」の育成につながる“真の学力”が十分に育成・評価されていないという指摘がある。AO・推薦入試にしても本来の目的に沿った運用がされていないケースが目立ち、大学生の基礎学力不足という問題が話題になって久しい。

高校教育・大学教育・大学入学者選抜の三位一体の改革による高大接続の実現へ

「確かな学力」を着実に養うには、幼児教育から、小学校・中学校・高校、さらに大学・短大や専門学校へとつながる一貫した方針での積み重ねが必要となる。しかし、現状は、高校・大学における教育が一貫性のネックになっており、高校から大学への接続もうまくいっていない。問題の焦点は、高校教育・大学教育をつなぐ大学入試にある。そのような認識から、中教審は、抜本的な大学入試改革を軸にした、高校教育・大学教育・大学入学者選抜の三位一体の改革による高大接続の実現を提案している。その概要を示したのが図2だ。

中教審がめざしているのは、高校で身につけた「生きる力」「確かな学力」を大学教育でさらに発展・向上させるために、大学入学時点で求められる力を“多面的・総合的”に評価する入

学者選抜。そのためには、現行の大学入試センター試験と大学が個別に実施する入試をセットで改革することが必要になるとしている。では改革の中身をみていこう。

主要な改革の一つが、知識・技能を単独で問う内容の大学入試センターを廃止し、「大学入学希望者学力評価テスト(仮称)」(図3)を設けること。達成度テスト(発展レベル)として議論されてきたもので、大学入学希望者がこれからの大学で学ぶために必要な力を測るためのテスト。「確かな学力」のうち、特に「思考力・判断力・表現力」を中心に問うものとなる。そのため、試験問題も工夫される。「教科型」の出題だけではなく、教科の枠を超えた知識・技能の活用力を評価する「合教科・科目型」「総合型」の出題も設けられる予定だ。試験回数に関しては、一発勝負型ではなく年複数回の実施を検討。また、1点刻みの評価を避け、段階別表示による成績評価を行う。

そして、この改革と併せて中教審が提言しているのが、大学の個別選抜の改革だ。現状の知識偏重型・公平性重視の入試から脱却し、各大学のアドミッションポリシーに基づいて、受験生のさまざまな能力や得意分野、バックグラウンドなどを多元的に評価する入試への変革が求められている。特に選抜性の高い大学においては、「主体性・多様性・協働性」を含む「確かな学力」を高い水準で評価することが必要だとされている。

一方、高校には、「高等学校基礎学力テスト(仮称)」(図3)の導入が検討されている。「達成度テスト」(基礎レベル)という仮称で議論が進められていたもので、高校のカリキュラムで学んだことが、その時点でどの程度身につけているかを測ることが目的。そのため、在学中に複数回実施する。こちらは、「思考

図3 大学入学希望者学力評価テストと高等学校基礎学力テストの概要(抜粋)

総称	学力評価のための新たなテスト(仮称)	
個別名称	大学入学希望者学力評価テスト(仮称)	高等学校基礎学力テスト(仮称)
目的・活用方策	<ul style="list-style-type: none"> ● 大学入学希望者が、これからの大学教育を受けるために必要な能力について把握する 	<ul style="list-style-type: none"> ● 生徒が、自らの高校教育における学習の達成度の把握および自らの学力を客観的に提示することができるようにし、それらを通じて生徒の学習意欲の喚起、学習の改善を図る
対象者	<ul style="list-style-type: none"> ● 大学入学希望者 ※大学で学ぶ力を確認したい者は、社会人等を含め、誰でも受験可能 	<ul style="list-style-type: none"> ● 希望参加型 ※できるだけ多くの生徒が参加することを可能とするための方策を検討
内容	<ul style="list-style-type: none"> ● 「教科型」に加えて、教科・科目の枠を超えた思考力・判断力・表現力を評価するため、「合教科・科目型」「総合型」の問題を組み合わせる出題 ● 大学および大学入学希望者に対し、段階別表示による成績提供 	<ul style="list-style-type: none"> ● 高校で育成すべき「確かな学力」を踏まえ、思考力・判断力・表現力を評価する問題を含めるが、学力の基礎となる知識・技能の質と量を確保する観点から、特に「知識・技能」の確実な習得を重視 ● 各学校・生徒に対し、成績を段階で表示
実施方法	<ul style="list-style-type: none"> ● 年複数回実施 ● CBT方式*での実施を前提に開発を行う 	<ul style="list-style-type: none"> ● 在学中に複数回(例えば年間2回程度)高校2・3年での受験を可能とする ● CBT方式*での実施を前提に開発を行う

文部科学省 中央教育審議会 高大接続特別部会 第21回 2014.10.24 資料より作成

*Computer Based Testing. コンピュータ上で行う試験方法のこと

力・判断力・表現力」を問う問題も含むが、基本的には「知識・技能」を問う内容となる予定だ。このテストは、高校在学中には生徒の学習意欲の喚起や学習の改善の指導などに役立てられ、進学や就職の際には、基礎学力を証明する材料としても活用される。

ここで2つの新テストと大学の個別選抜の役割を、図1を参照しながら改めて整理しておこう。「高等学校基礎学力テスト(仮称)」は主に「知識・技能」の評価、「大学入学希望者学力評価テスト(仮称)」は主に「思考力・判断力・表現力」の評価、大学の個別選抜は「主体性・多様性・協働性」を含む「確かな学力」の総合的な評価という役割をそれぞれ担っている。全体を通して「確かな学力」を段階的に評価する流れが作られようとしていることがわかる。なお、これらのテストの選抜への活用方法は、大学によってさまざまなバリエーションが考えられる。「大学入学希望者学力評価テスト(仮称)」と個別選抜を組み合わせる大学もあれば、主に「大学入学希望者学力評価テスト(仮称)」を活用する大学もあれば、基礎学力を重視して主に「高等学校基礎学力テスト(仮称)」を活用する大学もありうる。

アクティブラーニングによる授業など 大学教育の質的転換が求められている

さて、ここまで解説した一連の改革が実行され、望ましいかたちで高大接続が実現できれば、大学には、それぞれに「確かな学力」を身につけた、多様な学生が集まってくることになる。この素地のうえに、社会にイノベーション力を備えた人材を送り出すための大学教育の改革も推し進められていく。

中教審は、「主体性・多様性・協働性」を養う観点から、大学教育の質的転換の断行を唱えている。具体的には、授業のア

クティブラーニングへの転換、特に少人数のグループワーク、集団討論、反転授業の導入、さらに中身を伴った留学やインターンシップなどの学外の学修プログラムの充実などだ。さらに、高校教育から、アクティブラーニングを中心とした大学での本格的な学修へと学生をスムーズに接続していくために、初年次教育の役割が重要になってくることも指摘している。

具体的なスケジュールをみると、「高等学校基礎学力テスト」は2019年度から、「大学入学希望者学力評価テスト」は2020年度からの導入が予定されている。プレテストの準備は2017年度が予定されており、まだまだ先の話というわけではなく、中教審における議論や提言を受け、各大学も入試改革・教育改革には着手しており、一部では具体的な取り組みも始まっているのだ。

東京大学は、多様な学生構成の実現と学部教育のさらなる活性化を目的として、2016年度入試から、「自ら主体的に学び、各分野で創造的役割を果たす人間へと成長していくこととする意志をもった学生」を選抜する「推薦入試」をスタートする。また、京都大学は、同じく2016年度入試から高大接続と各学部が求める基礎学力を重視した「特色入試」をスタート。いずれも、中教審が掲げた、人物を多元的に評価する個別選抜を先取りしたかたちだ。このほか、全学的な初年次教育の改革に動き出している大学や、前述のようにアクティブラーニングの導入に積極的に取り組む大学も出てきている。

このような動きは今後ますます加速・拡大していくことが予想される。

現時点で高校生が進学先を選択する際にも、各大学が学生の「主体性・多様性・協働性」の育成のための教育改革に取り組んでいるか。その前提としての入試改革にも着手しているか。そしてその本気度はどうなのかをしっかりと調べる必要があるといえるだろう。